

# 南アジアのアフリカ系民族スイッディー

—— 研究ノート ——

## *Siddī*-Ethnic group of African origin in South Asia

小 磯 学

キーワード：スイッディー、アフリカン・ディアスポラ、南アジア、  
バーワー・ゴール、アイデンティティ

### 要 旨

奴隷として、あるいは自らの意志でアフリカ大陸の外に居住することになったアフリカン・ディアスポラは、アメリカ大陸だけでなく南アジアにも多くの足跡を残している。その一端は紀元前後まで遡るが、主に大航海時代以降にやってきた人々が、特定の聖者への信仰など独自の文化を守り今日に至っている。一方で、20世紀末以降に研究者らの注目を集め舞踊団の海外公演も急増したことから、外部のまなごしに触れ新たなアイデンティティも形成されつつある。

### はじめに

1500年頃からのおよそ400年間には、ヨーロッパの大航海時代を端緒にアフリカ奴隷貿易が活発化した。この間にアフリカから連れ出された成人男女・子供の数は1500万人に上るという（ウェブサイト：UN Web Services Section NDa）。人類史上稀に見るこの負の遺産の多くは、アフリカ西岸から大西洋を越えて南北アメリカ大陸に運ばれ、サトウキビやコーヒーなどのプランテーションや銀の採掘に従事させられた。

しかし奴隷は西に運ばれただけでなく、アフリカ東岸から東にインド洋を経て南アジア（主に今日のパキスタン南部やインド西部）へ、一部はさらに東南アジアや東アジアの日本にまで運ばれていたことはあまり知られていない（トーマス 2017）。こうした東方世界への奴隷貿易の歴史は、アメリカ大陸が発見される遥か以前の紀元前後まで遡り、今日までの2000年間でアフリカから南アジアに運ばれた奴隷の数はおよそ400万人とも推計されている（ウェブサイト：Ali 2011）。そしてその労働条件などの実態は、アメリカ大陸の場合と比べると農園などの強制労働に限定されることなくより多様で、傭兵（雇い兵）や権力者の召使いなどに就き、やがて高い社会的身分を得た者も多かった。同時にまた、アフリカ出身者の中には奴隷ではなく自由な身分の傭兵や商人、船員などもいたという。

本稿では、今日インド人やパキスタン人として暮らすこうしたアフリカに出自をもつ民族集団スイッディー *Siddī* に視点を当て、この集団の歴史的背景と現状について概観する。筆者の

インドでのフィールドワークで出会う機会があり、より深く知りたくなったことが直接の動機である。ここでは論考や著作のすべてを網羅する余裕はないものの、彼らをアフリカに出自をもつ人々全体の中に位置づけつつ理解を深めることが必要な作業であった。

スイッディーについては詳細な史料が残されているわけではなく、実際にはその歴史を明確・正確に語ることは難しい。しかし彼ら自身はアフリカ起源というアイデンティティとともに聖者崇拝を初めとする固有の文化を今日に至るまで守り続けている。彼らを知ることがアフリカと南アジアとの交流史の一端を復元する作業となるだけでなく、南アジアの文化的宗教的多様性の一側面についても理解を深める一助になると考える。

## 1. アフリカン・ディアスポラ（ブラック・ディアスポラ）

「ディアスポラ＝離散」とは元来はユダヤ人を指す言葉であるが、アフリカ大陸の外に居住するアフリカ（系）人に対しても1950年代後半から用いられてきた。大枠では(1) 奴隷貿易による強制的離散と(2) 移住による自発的離散に大別される。その背景には、近代ヨーロッパの植民地主義的な思想に対抗しこれを是正するポスト・コロニアリズム的な多文化主義（多様性と重層性）の台頭があるという（駒井・小倉 2011；荒木 2010；早尾 2008-2009；Alpers 2013；Davies 2008；Shepperson 1993；ウェブサイト：Alpers 2001）。

とくに大航海時代を端緒にヨーロッパ勢力によって進められた奴隷貿易・奴隷制度のもとでは詳細な記録が残されず、また奴隷となった人々も多くの地域から引き立てられた後に大陸の外で数世代が経過するなかで、一人ひとりの正確なルーツが失われてしまった。そのため彼らにとっての「アフリカ」は、実体を伴わない象徴的なものになってしまっているのが実情である（荒木 2010）。

## 2. スイッディーの地理的分布と言語

スイッディーとは、今日の南アジアの主にパキスタン南部からインド西・中部にかけて居住するアフリカン・ディアスポラの総称で、「インド洋のアフリカン・ディアスポラ」とも呼称される（Jayasuriya 2008b, 2008c, 2008d；Jayasuriya and Pankhurst 2003；ウェブサイト：Ali 2011）（図1）。その人口が最も多いのがパキスタンのバローチスタン州とシンド州の南部の約25万人（一部イラン南東部を含む）で、バローチスタン

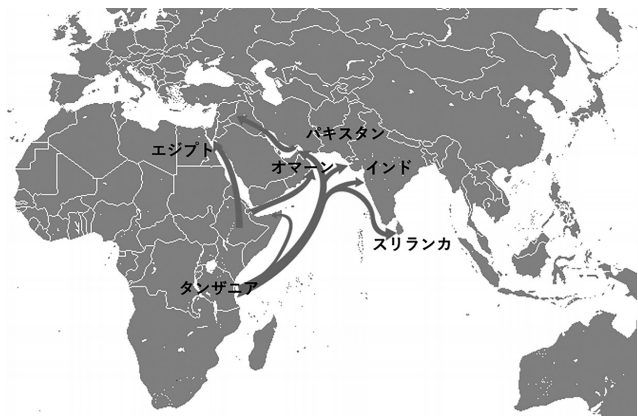


図1 インド洋のアフリカン・ディアスポラの移動ルート  
(Courtesy of Mr. Luke Duggleby. ウェブサイト：The Sidi Project に加筆)

州南部のアラビア海に面したマクラーン地方ではその人口の4分の1に達している。またカラチーにも彼らが集住するリヤリー地区が知られている。こうした人々には、1947年のインド・パキスタン分離独立の際にインド側から移住した人々も多く含まれる（ウェブサイト：Rey 2016；Kwekudee 2012；Schomburg Center for Research in Black Culture 2011a）。

一方インド側は2011年度の国勢調査によると全体で2万人ほどで、南西部のカルナータカ州＝10,477人、グジャラート州＝8,661人に大半が集中している。かつてポルトガルの植民地だったダマン・ディーウ連邦直轄領やゴア州にも各々200名弱が居住する（図2、表1）。さらにテランガーナー州＝100名、インド中西部のマハーラーシュトラ州（とくにムンバイ）＝200名、東部のビハール州＝40名とする情報もある（ウェブサイト：Joshua Project 2018）<sup>1</sup>。

ただし後述するように、数百年の間に南アジアの地元や一部ポルトガルの人々との混血も確認されており、スイッディーの女性がこうした家庭に嫁ぎ子供の父親が属する集団の姓を継承した場合には国勢調査に反映されにくい。どこまでをアフリカ系と考えるかという点を含め、正確な人口の把握は困難といえる。

スイッディーの言語は、今日では各々が居住する南アジア各地の言語がそのまま母語となっている<sup>2</sup>。そのため地域・言語が異なれば互いに意志の疎通はできない。またダマン・ディーウ連邦直轄領などのようにグジャラート語に幾分かのスワヒリ／バントゥー語系の単語の使用が見られる例もあるものの、スワヒリ語そのもので会話する力は忘れ去られている。



図2 インドにおけるスイッディーの分布  
（ウェブサイト：Joshua Project 2018, India Peoples Map Siddi に加筆）

表1 南アジアのスイッディーの人口

地域	人口	出典
<b>パキスタン</b>		
バローチスタン州・シンド州	250,000	Kwekudee 2012
<b>インド</b>		
グジャラート州	8,661	Government of India 2011
カルナータカ州	10,477	
ダマン・ディーウ連邦直轄領	193	
ゴア州	183	
合計	269,514	

### 3. スイッディーの表記

スイッディーの表記及びその発音は、彼らが今日暮らしている地域の言語ごとにやや異なっている（発音される名称とその表記がかならずしも一致しない場合もある）。主だったものとしては、スィーディー *Sidī*（インド西部のグジャラート州）、スイッディー（インド中西部・南西部のマハーラーシュトラ州、カルナータカ州、テランガーナー州）、シーディー *Shīdī*, *Sheedī*（パキスタン西・南部のパロチスターン州とシンド州）をあげることができる。これらの名称は「ムハンマドの血筋、高貴な血筋を持つ人」を意味する *sayyid*, *saiyed*, *saiyidi*, *saiadi* に由来するとされ、実際に社会的に高い地位に就いた者もいるために、スイッディー／スィーディーが黒人権力者を指す言葉として使われる場合もある（村山 2005；Ali 2011；Camara 2004：102；Catlin-Jairazbhoy and Alpers：19；Chauhan 1995：1；ウェブサイト：African Heritage in India）。

この他パキスタンでは西部沿岸部のマクラーン地方に多く住むことからマクラーニー *Makrānī*、あるいはかつての奴隷貿易の拠点がザンジバル（現タンザニア領ザンジバル諸島）だったことからザンジバリー *Zanzibarī* とも呼ばれている。さらに、一部がアビシニア（エチオピアの旧名）に出自をもつため（あるいはこの地を経由して運ばれた？）、ハブシー *Habshī*（アビシニアの人）と呼称されることもある（ウェブサイト：Ali 2011；Afropede@）。いずれもあくまで便宜的な呼称として受けとめる必要があり、実際にはより広域から来訪した人々全般を指す場合が多く、北は紅海沿岸から南はタンザニアあたりまでを含む範囲すべてを考慮せねばならない（エチオピア、メケレ大学のウォルバート・シュミット氏からのご教授による）。

スイッディーはこのようにアフリカ東部のさまざまな土地から海路（さらにはアラビア半島経由の陸路）を通じて何世紀もの間に幾度となく南アジアに辿り着いた人々で、アラブ人、ポルトガル人、オランダ人らの奴隷貿易によるものがその大部分を占める（Patil and Gai 2008）。各々の詳細な記録が残されているわけではなく、スイッディー自らが祖先の正確な出自や歴史を語りついでいるわけでもない。したがって、出自がアフリカという点で一致してはいても、そもそもそのすべてが単一の民族に属しているとはいえないのが実情である。

### 4. スイッディーの全般的な特徴

歴史的に振り返ると、スイッディーはアフリカから強制的に運ばれた奴隷と自発的に移住した者との大別できる。また大西洋を越えてアメリカ大陸に運ばれた人々とは対照的に、以下の4つの特徴をもつことが指摘されている（ウェブサイト：Ali 2011）。

①インド洋のアフリカン・ディアスポラは、社会的流動性が高い：彼らの多くがイスラーム教徒であるとともに南アジアのイスラーム教が支配権力の座にある地域・時代に運ばれたため、女性の奴隷の下に生まれた子供はイスラーム法に則り自由な身分を得ることができた。また男性の奴隷も経営手腕や乗馬などの能力があれば、奴隷の身分から解放され各種の役職や兵役などの仕事に就くことができた。

②兵士としての徴用が多かった：男性は当初から兵士としての資質が高く評価されており、また南アジアには彼らと利害関係などが生じるような血縁者がいないことから地元権力者らの

信頼が篤く、兵士や守衛として徴用された。

③高い女性の割合：アメリカ大陸では採掘やプランテーション農場での強制労働が奴隷の主たる目的であり、男性の需要が高かった。これに対しインド洋では女性の割合が高く男性の倍にも達し、その多くが家事労働とともに第2夫人や妾となった。そしてその子供らの出自を示す姓には夫側の家系が優先されたため、姓の上ではアフリカの出自が継承されないことにもなった。

④黒色の肌はアフリカ出自の判断基準にならない：インド洋を渡った人々の肌の色が黒色から褐色と当初から多様であっただけでなく、南アジアでもとくにインド南部などではもともと同様の肌色の人々が多かった。南アジアにも肌色に基づく差別はあるものの、同地では宗教や民族、あるいはカーストがより重視され、アメリカ大陸で見られたような肌色に基づく人種差別は顕著ではなかった。

## 5. 研究動向と世界的趨勢

南アジアにおけるアフリカ系黒人の歴史は紀元前後まで遡る可能性があるが、より明確なスィッディーの記述は7世紀頃から散見され始める。ただしこれらの人々を対象とした民族学的・社会的な研究は、南アジアを植民地化していたイギリス人や当時のインド人らの19世紀半ばから20世紀前半にかけての記述が端緒となる。それらによれば、アフリカ東岸だけでなくオマーンのマスカットなどアラビア半島東岸からも毎年600-700人の奴隷が運ばれ、馬飼や草刈り、日雇い、商人や大工、鍛冶屋などの下働きにつき、一部は権力者の腹心の召使いに徴用される者もいたという。また数世代を経るなかで本来の母語であったスワヒリ語が継承されおらず、各々が暮す南アジア各地の言語が日常語となっている。ただときおりその南アジアの言語とスワヒリ語が混ざったビジン言語で意思疎通を図ることも見られた (Burton 1851: 253-257; Campbell 1899: 11-12; Russell 1916: 409; Enthoven 1922: 332; Banaji 1932; Sorley 1933: 378; Trivedi 1961: 1-3; ウェブサイト: The Sidi Project)。こうした状況は、今日ともほぼ共通するものである。

インド独立後しばらくは、グジャラート州ジュナーガル県の国勢調査 (Trivedi 1961) を除くと調査事例が少ない。世界的な動向を見ても、アフリカン・ディアスポラの研究がひとつの潮流になっていくのは、ユネスコ主催で1965年にタンザニアで開催された第1回アフリカ歴史学者会議が嚆矢といわれている (Kessel 2006; Ranger 1968)。当初はアメリカ大陸が主たる研究対象であったが、その後「インド洋のディアスポラ」、とくにスィッディーの歴史や個別の地方の集団についての論考が20世紀末から今世紀に入って相次いでまとめられることになる (Bhatt 2017; Jayasuriya and Pankhurst 2003; Sadiq Ali 1996; Chauhan 1995など)。またスィッディーはアフリカの要素を強く残す固有の音楽・舞踊を伝承していることもあり、2000年にはアメリカの民族音楽学研究者らが中心となってグジャラート州ラージピプラで国際シンポジウムが開催され、パフォーマンス、アートだけでなく歴史的文化的背景についての論考が後にまとめられている (Catlin-Jairazbhoy and Alpers 2004)。



さらに2003年にはウェブ上のネットワーク「アジアにおけるアフリカン・ディアスポラ協会 The African Diaspora in Asia (TADIA) Society」が設立され、世界各地の人類学、言語学、民族音楽学、地理学、社会学など多分野に渡る300人の研究者の情報交換の場となっている。この協会は後述するユネスコの「奴隷の道プロジェクト」と共催で2006年にインドのゴア州パナジでスイッディーに関する11日間に及ぶ国際会議を開いている。22カ国から集まった80名が、世界の他の地域を含むアフリカン・ディアスポラの歴史・文化・社会・今日の地位向上などの多岐に渡るテーマについて発表を行い、2年後には書籍としてもまとめられた (Prasad and Angenot 2008 ; Kessel 2006 ; Pereira 2006)。

また2011年には開発史研究のための南南交流プログラム (SEPHIS) とスイッディーゴマ・アル・ムバリク慈善信託<sup>3</sup>との共催でグジャラート州バーオナガルでワークショップが開かれ、スイッディーが直面するインド社会における差別や認知不足、教育や独自の文化の保存の問題などについて議論されている (ウェブサイト : Modi 2011)。

展示会も注目される。ニューヨーク公立図書館のシヨンバーグ黒人文化研究センターは2011年にオンラインでデジタル展示「インド洋世界のアフリカン・ディアスポラ」を立ち上げているが (ウェブサイト : Schomburg Center for Research in Black Culture 2011b)、これを基盤にした実際の展示会「魂の刺繍－キルトのパッチワーク」(スイッディーの女性が裁縫したキルトの展示) と「インドのアフリカ人：奴隷、将軍、そして支配者へ」(主に15世紀以降の絵画資料などを展示) を各々2011年と2013年に同センターで開催した (Schomburg Center for Research in Black Culture 2011b, 2011c, 2011d ; New York Public Library 2013)。このうち「インドのアフリカ人」は、その後2014年から2016年にかけて国際連合本部のほか、インド、ニューデリーのインディラ・ガンディー国立芸術センターや南アジア大学、グジャラート州ガンディーナガルのグジャラート国立立法科大学などで巡回展示されている (ウェブサイト : Sen 2016 ; South Asian University 2016 ; United Nations 2016 ; The Times of India 2015)<sup>4</sup>。上記はいずれも同種の展示会としては初めてのもので、スイッディーが世界的にも注目されつつあることの証左といえる。

またこの間2013年3月25日の「奴隷および大西洋間奴隷貿易犠牲者追悼国際デー」には、奴隷制や人種差別、偏見の撲滅の意味を込めた記念碑「Ark of Return (帰還の方舟)」が国際連合本部前の広場に設置され、奴隷貿易の歴史を反省し未来への展望を抱く機運が高まっている (ウェブサイト : UN Web Services Section NDb)。

スイッディー及びアフリカン・ディアスポラ全般へのこうした関心の高まりは、ユネスコが1994年に寛容の文化とすべての人々の平和な共存を広めるための運動として立ち上げた「奴隷の道プロジェクト」や国際連合による2004年の「奴隷制に対する戦いと奴隷制度廃止の国際記念年」、2007年の「大西洋奴隷貿易廃止200周年国際記念年」の指定といった一連の情勢に呼応するものといえる。いずれも奴隷の子孫としてのアイデンティティの強化や彼らに関わる持続的開発や教育的経済的環境の向上、そして文化観光を踏まえ、未来への展望を見据えて彼らに対する理解を深めることが求められている (ウェブサイト : 松浦 2007)。国際連合が2011年を「アフリカ系の人々のための国際年」とし、2015年からの10年間を「アフリカ系の人々のための

国際の10年」と定めたこともこの延長線上にある（国際連合広報センター 2015, 2011）。

このような世界的な趨勢も背景となり、南アジア研究の中でこれまで認知度がかならずしも高くなかったスィッディー研究が、とくに21世紀に入ってからグローバルな視点の中で活性化しつつあるといえる。

## 6. 歴史的概観

アフリカからの奴隷貿易は、エジプトのプトレマイオス朝期やローマ帝国が栄え東西交易が活性化した紀元前後頃にすでに行われていた。その一部が今日のインドにももたらされたことが、1世紀にエジプト在住のギリシア系商人が著したとされる『エリュトラ海案内記』にも記されている（薀 2016：1巻22、24、37、134、288-289；Warmington 1974: 261-262）<sup>5</sup>。またグジャラート州バリユガザ（今日のバルーチ）を「エチオピアの街」と呼ぶ77年頃のプリニウスの記述が知られ、多くのエチオピア（ないしアフリカ東岸一帯）出身の商人らがいたことが窺える（Kenoyer and Bhan 2004: 44-45）。4世紀の南インドからはエチオピアのアクスム王国の貨幣も発見されており、この頃にも交易・交流があったことを物語る（ウェブサイト：Rey 2016）。

具体的なスィッディーと呼ばれる人々についての記録が現れるのは、628年にグジャラート地方のバルーチを訪れたスィッディー商人の記述が嚆矢となる（Shroff 2013；ウェブサイト：Shekawat 2012: 2）。拡大するイスラーム教勢力（アラブ商人）による奴隷貿易によって（あるいは自らの意志で）南アジアの地に辿り着き、高い身体能力と忠誠心で知られるようになり、奴隷として、あるいは傭兵、貿易商人や船乗り、職人、農役、家事使用人などとして需要が高かった。イスラーム教勢力初の南アジアへの軍事的進出の端緒となる712年のムハンマド・ビン・カーシムによる今日のパキスタン南・中部の征服の際、その遠征軍の一部もスィッディーから構成されていた。

また14世紀には、インド東部のベンガル地方の君主が所有していた8000人の黒人奴隷が次の世代に追放された際にグジャラート地方などインド西部に逃れ、それが当地方のスィッディーの一部の祖先となった可能性も指摘されている（Trivedi 1961: 21）。

こうしたスィッディーの中には、エチオピア生まれのマリク・アンバル（1548-1626）のようにインド中・南部部のアフマドナガル王国の王にまで上り詰めた人物もいる。また彼はインド西岸の要衝の地ジャンジラー島全体を要塞島に改造しスィッディーの軍事拠点にするとともにジャンジラー藩王国（今日のマハーラーシュトラ州ラージガル県）の首都とし、1948年のインド独立までスィッディーの藩王が主権を握っていた。18、19世紀には銀貨・銅貨さえも発行している（Pankhurst 2003: 197-198；Sadiq Ali 1996: 87；Chauhan 1995: 211-213）<sup>6</sup>。

16世紀以降にヨーロッパの大航海時代に入ると、イスラーム教徒の商人に加え、新たにポルトガル商人やグジャラート商人がアフリカ東岸から奴隷を南アジアにもたらしていった。ただし1807年にイギリスが奴隷貿易禁止法を制定すると、その後半世紀ほどの間にヨーロッパ諸国やアメリカでも奴隷貿易が衰退・廃止されていくことになる。

## 7. 遺伝学的検証

20世紀末になってスイッディーの遺伝学的研究が行われ、インド南西部のカルナータカ州の事例では約60%がアフリカ系、28%が南インド系、12%がポルトガル系の特質を継承していることが明らかにされた。これは数百年の間に混血が繰り返されてきたことの証左となっている (Gauniyal, Chahal and Kshatriya 2008; ウェブサイト: The Hindu 2011)。またインド細胞分子生物学センターによるグジャラート州とカルナータカ州の別の研究からは、およそ5000年前のバントゥー拡散 (バントゥー系諸民族が今日のナイジェリアからアフリカ南部・東部へと広がった) にまで遡る遺伝的系譜が確認されている (Shah et al. 2011)。

## 8. 指定部族

インド政府は憲法に基づき、「言語や宗教などの文化的独自性、社会的経済的後進性、山岳地など隔絶度の高い地域での居住」に当てはまる民族集団を「指定部族 (Scheduled Tribe, ST)」に指定する制度を設けている。国家発展の本流への合流を促すことを目的としており、指定されると教育、雇用、議席の留保を含む各種の優遇処置が与えられる (押川 2012)。ただし指定にあたっては客観的・絶対的基準がなく、その都度行政上の判断に委ねられているため多くの課題が指摘されている。スイッディー全体ではなくその一部が指定部族に指定されているが、まさにそうした課題の弊害も生じている。

スイッディーは、前述したように実際には各々異なる歴史的経緯の結果南アジア各地に散在しているため、単一の民族としては扱うのが難しい。とはいえ、同じグジャラート州でありながら (農村地域が主体を占める) サウラーシュトラ半島一帯に暮らす集団のみが指定部族に指定された (ウェブサイト: Government of India 2011; Basu 2005)。このため彼らは優遇処置によって教育の機会を得て公務員などの職に就く者が多く、指定部族とされなかった都市部に住むスイッディーよりも経済的に豊かな生活を送っているという。こうした社会的経済的格差は、スイッディーの人々がインド国民としての意識を高めていく上で禍根を残すといわざるをえない。

## 9. 信仰と聖者崇拜

スイッディーの人々の信仰ないし宗教は多様な要素が混在しており、独自の信仰を受け継いでいる。大枠ではその大部分がイスラーム教徒でハナフィー学派のスニー派が多いとされるが、キリスト教徒 (カトリック) やヒンドゥー教徒もわずかながら存在する (Trivedi 1961: 24)。とくにヒンドゥー教徒に関してはインドに辿り着いたのちに改宗したと考えられる。とはいえ、彼らは特定の宗教にそれほど拘ることをせず、たとえばイスラーム教徒として預言者ムハンマドや『クルアーン』を崇敬するとしてもその内容までは把握しておらず、1日5回の祈りや金曜日の集団礼拝もとくに実践していない。このため正統派のイスラーム教徒からは異端視される傾向にある。

スイッディーの人々が宗教の枠を超えて共通の崇拜の対象としているのが、聖者たちとその



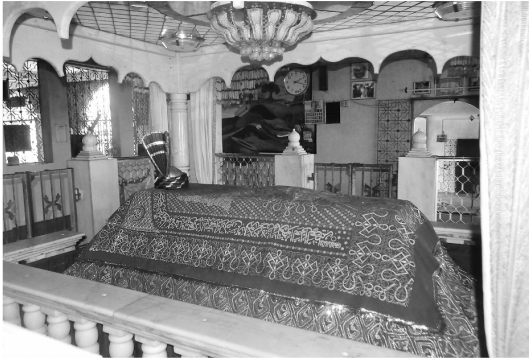


図3 バーワー・ゴールの墓  
(ラタンプル。撮影：小磯 2011年)

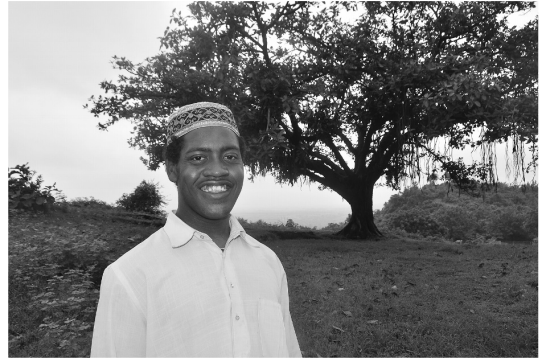


図4 バーワー・ゴールの墓のスイッディーの守衛人  
(ラタンプル。撮影：小磯 2011年)

廟 *dargah* である。なかでも中心的な位置を占めるのが聖者バーワー (バーバー)・ゴール *Bāvā/Bābā Gōr* である<sup>7</sup>。彼の廟は、グジャラート州バルーチ県ラタンプルに祀られている (Jayasuriya 2008a ; Basu 2004, 1993) (図3、図4)。彼自身を記述した史料は乏しいものの、15世紀初頭に亡くなった実在した人物にさまざまな伝承が重なり合って今日に至っていると考えられる (Francis 1986)。それによれば、彼はアビシニア (エチオピア) 出身の黒人のビーズ商人であるとともにスーフィー (神秘主義者) (加賀谷 2002) の聖者であった。もとはナイジェリア北部のカノの出身で、スーダンを経由してメッカ巡礼のあと今日のパキスタン、インドまで辿り着いた裕福な商人であったとも伝えられている (ウェブサイト : Lodhi 2008: 4)。

瑪瑙・紅玉髓の産出地であるラタンプル (語意:「宝石の町」) では、この褐色の原石を加熱すると赤色のガラスのように変容し美しく輝くことを「発見」し、インドとアフリカやアラビア半島方面との瑪瑙貿易を発展させたとされる。このため今日、紅玉髓はバーワー・ゴラー「バーワー・ゴールの (石)」とも呼ばれている (Murayama, Koiso and Endo 2018 ; 小磯・遠藤 2012 ; 遠藤・小磯 2011 ; Trivedi 1961: 24)<sup>8</sup>。

バーワー・ゴールにはラタンプルの廟の他、主に彼が訪れたとされる南アジア西部各地に廟を象った、あるいはシンプルな石壇の「記念碑」チッラー／チッコ *chillā/chillo* またはタキア *takia* が建立されている。バーワー・ゴールには3人の兄弟と4人の姉妹がいたとする伝承があるが (Trivedi 1961: 24)、このうち最重要視される弟のバーワー・ハバシ／アバス *Bāvā Habash/Abbas* と妹のマーイー・ミースラー *Māi Mīsrā* も各々の廟と記念碑がバーワー・ゴールのそれに隣接して築かれ、この3者がセットで祀られることが特徴となっている (図5)。この



図5 マーイー・ミースラーのチッラー  
(ムンバイ。撮影：小磯 2018年)

2者の名前はハバシ=アビシニア、ミースラー=ミスル=エジプトとそれぞれ奴隷貿易の拠点でもある地域を意味していることから、南アジアにやってきた黒人全体を象徴しているともされる (Basu 1993: 294)。

この3人・3つの廟／記念碑はそれぞれヒーリングパワーを持つと信じられている。このうちバーワー・ゴールは全般的・ユニバーサルな力を有しているが、なかでも病気の改善、悪霊払い、正義の審判、そして男女の不妊治療を担う力を持つ。このうち男性の不妊解消はとくにバーワー・ハバシが、女性の不妊解消や問題行動のある夫の更生などについてはマーイー・ミースラーが受け持ち、婚姻後の生活改善に関しての信仰の対象となっている (Basu 2004: 66; ウェブサイト: Singh 2015: 2)。こうしたご利益を求め、各地の廟・記念碑にはイスラーム教徒のみならずキリスト教徒、ヒンドゥー教徒、シク教徒、さらにはパールシー (ゾロアスター教徒) も参拝に訪れ崇拝の対象となっている<sup>9</sup>。

パキスタン側でもバーワー・ゴールはマーイー・ゴール *Māmā Gōr* の名で崇敬されているが、当地ではさらにピール・マンゴー *Pīr Mangō* と呼ばれる13世紀のスーフィー聖者がスィッディーから崇拝されている。カラチ北部に位置するマンゴーピールにある彼の廟には「信者」とされる数百匹のワニが飼われていることでも知られている (Shekawat 2012: 6)。

さらにスィッディーの人々のこうした信仰の根幹には、共通してヒリヤル *Hiriyaru* と呼ばれるアフリカ起源の祖先崇拝があるという。死んだ祖先が霊となっていていつも身近におり、赤子の誕生や結婚式、葬式などの際には「証人」となって立ち会っていると信じられている (ウェブサイト: Shekawat 2012: 4)<sup>10</sup>。

## 10. 舞踊・歌

スィッディーは、アフリカ的な要素を継承するダンマール *dammāl/dhamāl* もしくはゴマ *goma* と呼ばれる男性中心の舞踏パフォーマンスでも知られる (図6)。「聖なる太鼓」ムガルマーンを演奏し、円形に並び舞うダンスとスワヒリ語の語彙が混ざった歌詞の歌などを特徴とする。前述したアメリカの民族音楽学研究者らが1999年に着手した調査が端緒となって世界的に注目され、とくにラタンブルを本拠地とするスィッディー・ゴマ舞踊団の場合には今日に至るまで「故郷」のタンザニアを初め、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ各地やマレーシアなど世界中に招聘され上演されてきた (村山 2005; Catlin-Jairazbhoy 2004; ウェブサイト: Singh 2015; Shekawat 2012: 5)。グジャラート州政府にとどまらず、今やインド政府にとっても観光資源・地域促進の重要な一躍を担う存在となっている。こうした現状は、スィッディーの人々が自



図6 スィッディーによるダンマール  
(ベラ、パキスタン。撮影: 村山和之氏 1997年)

らの存在を世界的・客観的に見直すことを促す大きな要因にもなった。

ただし同時にそれは、伝統の変容を伴うことにもなった。ダンマールとは本来は人に見せるものではなく、パーワー・ゴールの力を借りつつ神との合一を目的とする修行法の一つにはかならない。聖なる木曜日の夜、そして聖者のウルス *urs* (命日祭) ごとに廟の境内で行うのが習わしである。ところが国内・海外公演が増えラタンブルに不在となる時間が増え、それが適わなくなってしまったのである (村山 2005: 82)。

## 11. スィッディーのアイデンティティ

南アジア全体でも30万人弱ほどの少数民族スィッディーは、「インドの忘れ去られたアフリカ民族」、「忘れ去られたアフリカン・ディアスポラ」などと形容されてきた (ウェブサイト: Vallangi 2016; The East African 2008)。しかし20世紀末以降、そしてとくに今世紀に入ってから、海外の研究者の注目を集めたことが大きな要因となり、多くの論考や書籍が (ネット上にも多くが) 公開され彼らの存在が世界中でクローズアップされつつある。2018年9月にタンザニアで開催された国際会議「アフリカ-アジア 新たな知識の基軸2」でも、スィッディーのために分科会のひとつが設けられるほどであった (Murayama, Koiso and Endo 2018)。

こうしたなか、スィッディーの人々のアイデンティティも変容を遂げつつある。前述したように舞踊団が世界各地に直接赴くことで世界中の人々の眼差しが向けられることが「自分たちが何者であるか」をより一層客観的に考える場となったのである。彼らの出自はアフリカである。しかし冒頭で触れたように、数百年の間にアフリカ東岸の各地から南アジアのさまざまな地域へと移住を果たし、もともとの祖先の土地や言葉も忘れてしまった今、それは非常に曖昧で漠然とした存在でしかない。そのためたとえバングラデシュ地方のスィッディーなどの場合には、かつての奴隷貿易の拠点であったタンザニアのザンジバルとスワヒリ語を自らの祖先の土地と言語と定める傾向が指摘されている。すなわち、アイデンティティの「新たな創造」ということができる。そしてそれは、グローバリゼーションによって異なる文化間の混交が進む、今日の世界各地のアフリカン・ディアスポラ全体に共通して見られる傾向でもあるという (ウェブサイト: Singh 2015; Lodhi 2008: 8)。

## おわりに

筆者がスィッディーについて初めて知ったのは、1990年代の留学時に大学の図書館で彼らを扱った国勢調査の報告書 (Trivedi 1961) を見つけた時である。その後2011年には、ラタンブルで彼らに直接会う機会を持った。しかしスィッディーについてさらに情報を集めそれらに目を通し始めたのは、ここ数か月間のことに過ぎない。そこからようやく見えてきたのは、彼らが「忘れられた」人々どころか、南アジアとアフリカを結ぶ歴史的文化的に重要な証人であるという事実である。彼らの歴史を記録した正確な史料が限られ、また彼らの伝統の一部がたとえ「新たに創造」されたものであったとしても、彼らについての理解を深めることが数千年に及ぶ東西交流史の新たな一ページを刻むことを意味する。

ただ彼らの舞踊団が世界的に注目を集めている一方で、前述した指定部族の問題とともに、教育環境や識字率の低さ、農地を所有していながら技術・知識不足による僅少な収穫とその結果としての経済的貧困、古来の悪霊への信仰による医学的治療の欠如、人種差別など、スイッディーが今日抱えている問題は多い（ウェブサイト：Shekawat 2012）。またラタンブルのパーワー・ゴール廟の管理を巡っては、伝統的な廟の管理人（ムジャワル *mujavar*）らに対して1970年代に州政府が設立した慈善団体が管理への介入を始め、以前にはなかった確執も生じている（Basu 2004: 69-74）。

一個人では対処が困難な事柄でもあるが、スイッディーという人々についてささやかながらも理解を深めそれを広めることが、ひいては彼らの社会的認知度を高め生活の向上へと結びついていくものと信じる。

## 註

1. インド全体で5万人という情報もあり、そのうち12,000人がテランガーナー州（うち1万人がハイデラバード）とされる（Schomburg Center for Research in Black Culture 2011a）。
2. パキスタンではウルドゥー語やシンディー語、インドのグジャラート地方ではグジャラート語やカッチー語、マハーラーシュトラ地方でマラーティー語、ゴア州ではコンカン語、カルナータカ地方ではカンナダ語、ケーララ地方ではマラーヤラム語などである（ウェブサイト：Lodhi 2008）。
3. 各々 South-South Exchange Programme for Research on the History of Development（1994年設立、本部オランダ）、Siddigoma al-Mubarik Charitable Trust（本部インド、グジャラート州バーオナガル）。
4. 展示会「魂の刺繍－キルトのパッチワーク」は2011年2月1日－6月30日に、「インドのアフリカ人：奴隷、将軍、そして支配者へ」は2013年2月1日－7月6日にシオンバーグ黒人文化研究センターで開催（Schomburg Center for Research in Black Culture 2011b, 2011c）。また展示会「インドのアフリカ人：奴隷、将軍、そして支配者へ」は国際連合本部で2016年2月17日－3月31日に、南アジア大学で2016年3月21日－3月30日に開催された（United Nations 2016；South Asian University 2016）。
5. ただしインドのバルーチの王に献上された「音楽ができる少年」や「後宮のための美しい少女」は、ペルシア湾の港から輸出された白人系の奴隷であった可能性が指摘されている（薮 2016：1巻288-289、2巻24-25；Warmington 1974: 261-262）。
6. ジャンジラーには、すでに1100年にスイッディーの王国が成立していたとする記述も見られる（Bhattacharya 1970: 579）。一方、この島にスイッディーの軍隊を最初に送り込んだのはマリク・アフマドで、1490年とする説もある（Chauhan 1995: 19）。  
また都市全体がユネスコ世界文化遺産に登録されているアフマダーバードを象徴するイスラーム教建築のスイーディー・バシール・モスク（1452年建立）やスイーディー・サイヤド・モスク（1573年建立）も、君主の奴隷・従者であったスイッディーが建立したものである。
7. パーワー／パーバーは「グル」「聖者」「父」、ゴールは「深遠なる思考」を意味するため、「思慮深き聖者様」と訳することができる（村山 2005）。ゴーリー・ピール *Gōrī Pīr*「思慮深き聖者」（*pīr* も聖者の意）と呼ばれることもある。ただしパーワー・ゴールを14-15世紀頃にインド西部のマールワール地方を統治していたゴール家の王子とする伝承があり、それに従うならば単に「ゴール様」と呼ぶことが妥当となる（Basu 1993；Francis 1986）。
8. また1880年に記録された以下のような伝承もある：「（メッカにいる）預言者ムハンマドには遥かインドに輝く光が見えた。その調査を命じられたのが軍司令官のパーワー・ゴールだった。辿り着いてみるとマッカ・デーヴィー（バター女神の意）と呼ばれる鬼神が火に大量のバターをくべて燃やし、



男や子供たちを食らって過ごしていた。しかしパーワー・ゴールはイスラーム教徒ゆえに、悪魔とはいえ女性に触れることができないでいた。次いでやって来た弟のパーワー・ハバシ Bāvā Habash も、やはり協力できないでいた。しかし最後に駆け付けた妹のマーイー・ミースラー Māī Mīsrā が見事退治した。その後彼女もまた聖者としてラタンプルに祀られることになった」(村山 2005; Francis 1986)。

実際に今日、彼女の廟はパーワー・ゴール廟の隣りに建っている。またこの伝承に歴史的な事実を重ねて解釈するとすれば、パーワー・ゴールは7世紀の人物ということになる (Kenoyer and Bhan 2004)。

一方、実際にはラタンプルの瑪瑙・紅玉髓の採掘と利用は4500年前のインダス文明に遡り、パーワー・ゴール以前にビーズ製作に関してもすでに技術的に完成されていた (小磯・遠藤 2012; 遠藤・小磯 2011)。このため彼が実際に瑪瑙貿易に貢献したとすれば、アフリカやアラビア半島方面に新たな需要を見出し、インド洋を横断する新規の商取引を開拓したと考えられる (Kenoyer and Bhan 2004)。

9. このようにさまざまな宗教の信者が (本来イスラーム教に属する) スーフイーとその廟を個人的な崇拜の対象とすることは、南アジア各地で一般的に見られる。これは保守的・厳格なイスラーム教が禁止する個人崇拜に結び付く行為ともなり、厳格な立場からはスーフイーとその廟への信仰をイスラーム教として認めない場合がある。またムンバイには、パールシーが建立し信仰の対象としているパーワー・ゴールの記念碑廟がある (Shroff 2013, 2004)。
10. アフリカ的な祖先崇拜についてはカルナータカ州での報告例があるものの (Sadiq Ali 1996: 227-228)、南アジア全域のスイッディーの間で各々どのように継承されているのか、さらなる検証が必要である。逆にカルナータカ地方のスイッディーは、アフリカ的なものをすべて失ってしまったとする報告もある (Obeng 2004: 116)。

## 参考・引用文献

- Alpers, E.A. 2013 African Diaspora in the Indian Ocean: A Comparative Perspective. In Jayasuriya, S.de S. and R. Pankhurst (eds.), *The African Diaspora in the Indian Ocean*. Trenton, Africa World Press: 19-50.
- Banaji, D.R. 1932 *Bombay and the Sidis*. London, Macmillan.
- Basu, H. 1993 The Siddi and the Cult of Bava Gor in Gujarat. *Journal of Indian Anthropological Society* 28: 289-300.
- Basu, H. 2004 Redefining Boundaries: Twenty Years at the Shrine of Gori Pir. In Catlin-Jairazbhoy, A., and E.A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 61-85.
- Bhatt, P.M. 2017 *The African Diaspora in India: Assimilation, Change and Cultural Survivals*. New Delhi, Routledge India.
- Bhattacharya, D.K. 1970 Indians of African Origin. *Cahiers d'études africaines*. 10(4): 579-582.
- Burton, R.F. 1851 *Sindh, and the Races that Inhabit the Valley of the Indus*. Lahore, Khan Publishers (reprinted 1976).
- Camara, C. 2004 The Siddis of Uttara Kannada. History, Identity and Change among African Descendants in Contemporary Karnataka. In Catlin-Jairazbhoy, A. and A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publishers: 100-114.
- Campbell, J.M. 1899 *Muslim and Parsi Castes and Tribes of Gujarat* (reprinted 1990: Gurgaon, Vintage Books).
- Catlin-Jairazbhoy, A. 2004 A Sidi CD? Globalization of Music and the Sacred. In Catlin-Jairazbhoy, A., and E.A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 178-211.
- Catlin-Jairazbhoy, A. and E.A. Alpers 2004 Introduction. In Catlin-Jairazbhoy, A., and E.A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 1-25.
- Catlin-Jairazbhoy, A., and E.A. Alpers (eds.) 2004 *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow



Publisher.

- Chauhan, R.R.S. 1995 *Africans in India from Slavery to Royalty*. New Delhi, Asian Publication Services.
- Davies, C.B. (ed.) 2008 *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. 3 Volumes. Santa Barbara, ABC Clío.
- Enthoven, R.E. 1922 *Tribes and Castes of Bombay*. Vol.3 Bombay, Central Government Press (reprinted: 1975 Delhi, Cosmo Publications).
- Francis, P. 1986 Baba Ghor and the Ratanpur Rakshisha. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 29 (2): 198-205.
- Gauniyal, M., M.S. Chahal and G. Kshatriya 2008 Genetic Affinities of the Siddis of South India: An Emigrant Population of East Africa. *Human Biology* 80(3): 251-270.
- Jayasuriya, S.de S. and R. Pankhurst (eds.) 2003 *The African Diaspora in the Indian Ocean*. Trenton, Africa World Press.
- Jayasuriya, S.de S. 2008a Bava Gor. In Davies, C.B. (ed.), *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. Volume 1. Santa Barbara, ABC Clío: 152-153.
- Jayasuriya, S.de S. 2008b India and the African Diaspora. In Davies, C.B. (ed.), *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. Volume 2. Santa Barbara, ABC Clío: 553-562.
- Jayasuriya, S.de S. 2008c Indian Ocean and the African Diaspora. In Davies, C.B. (ed.), *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. Volume 2. Santa Barbara, ABC Clío: 562-569.
- Jayasuriya, S.de S. 2008d The African Diaspora in Asia (TADIA). In Davies, C.B. (ed.), *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. Volume 3. Santa Barbara, ABC Clío: 883-884.
- Kenoyer, J.M. and K.K. Bhan 2004 Sidis and the Agate Bead Industry of Western India. In Catlin-Jairazbhoy. A., and E.A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 42-60.
- Kessel, I. van 2006 Goa Conference on the African Diaspora in Asia. *African Affairs* 105(420): 461-464.
- Murayama, K., M. Koiso and H. Endo 2018 Carnelian Beads of South Asia and Bava Gor from Abyssinia. In University of Dar es Salaam, International Institute for Asian Studies and International Convention of Asia Scholars (eds.), *International Conference: Africa-Asia 'A New Axis of Knowledge 2'*. International Conference 20-22 September 2018, Tanzania: 34.
- Obeng, P. 2004 African Indian Culture Articulation – Mediation and Negotiation in Uttara Kannada. In Catlin-Jairazbhoy. A., and E. A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 115-139.
- Pankhurst, R. 2003 The Ethiopian Diaspora to India: The Role of Habshis and Sidis from Medieval Times to the End of the Eighteenth Century. In Jayasuriya, S.de S. and R. Pankhurst (eds.), *The African Diaspora in the Indian Ocean*. Trenton, Africa World Press: 189-221.
- Patil, P. V. and P. B. Gai 2008 In Davies, C. B. (ed.), Siddis in North Karnataka, India: Biomedical Status. *Encyclopedia of the African Diaspora – Origins, Experiences, and Culture*. Volume 3. Santa Barbara, ABC Clío: 840-841.
- Prasad, K.P. and J.-P. Angenot (eds.) 2008 *TADIA, the African diaspora in Asia: explorations on a less known fact*. Bangalore, Jana Jagrati Prakashana.
- Ranger, T.O. 1968 *Emerging themes of African History: Proceedings of the International Congress of African Historians held at University College, Dar es Salaam, October 1965*. London, Heinemann Educational Books.
- Sadiq Ali, S. 1996 *The African Dispersal in the Deccan*. London, Sangam Books.
- Shah, A.M. et al. 2011 Indian Siddis: African Descendants with Indian Admixture. *The American Journal of Human Genetics* 89, 154-161.
- Shepperson, G. 1993 African Diaspora: Concept and Context. In Harris, J.E. (ed.), *Global Dimensions of the African*

- Diaspora*. Washington, Howard University Press: 41-50.
- Shroff, B. 2004 Sidis and Parsis. A Filmmaker's Notes. In Catlin-Jairazbhoy. A., and E.A. Alpers (eds.), *Sidis and Scholars*. Essays on African Indians. Noida, Rainbow Publisher: 168-177.
- Shroff, B. 2013 "Goma is Going On" Sidis of Gujarat. *African Arts* 46(1): 18-25.
- Sorley, H. T. 1933 *Census of India 1931*. Volume 8, Bombay Presidency, Part 1-General Report. Bombay, Government of India.
- Trivedi, R.K. 1961 *Siddi a Negroid Tribe of Gujarat*. Census of India 1961, Volume V, Part IV-B, No.1 Ethnographic Series Gujarat. Delhi, Central Government Publications.
- Warmington, E.H. 1974 (originally published in 1928) *The Commerce Between The Roman Empire and India*. London, Curzon Press.
- 荒木圭子 2010「コラム／アフリカン・ディアスポラ」、小田英郎・川田順造・伊谷純一郎・田中二郎・米山俊直（監修）『新版 アフリカを知る事典』平凡社、317-318頁。
- 遠藤仁・小磯学 2011「インド共和国グジャラート州カンバートにおける紅玉髓製ビーズ生産：研究序説」『東洋文化研究所紀要』160、261-297頁。
- 押川文子 2002「指定部族」、辛島昇他（編）、『南アジアを知る事典』平凡社、317-318頁。
- 加賀谷寛 2002「スーフイズム」辛島昇他（監修）新訂増補『南アジアを知る事典』平凡社、383-385頁。
- 小磯学・遠藤仁 2012「赤い石がつくる道－カーネリアン・ロードをたどって」『季刊民族学』140号、37-84頁。
- 駒井洋（編集・監修）・小倉充夫（編集） 2011『ブラック・ディアスポラ』叢書グローバル・ディアスポラ5、明石書店。
- 薮勇造 2016『エリユトラー海案内記』全2巻（東洋文庫870、874）、平凡社。
- トーマス、ロックリー（不二淑子訳） 2017『信長と弥助 本能寺を生き延びた黒人侍』太田出版。
- 早尾貴紀 2008-2009「「ディアスポラ」をめぐる研究動向」、『アジア太平洋研究センター年報』36-37頁。
- 村山和之 2005「スィッディー：インドのアフリカ系「部族」について」、『東西南北』和光大学総合文化研究所年報2005：66-90頁。

#### ウェブサイト（以下、最終閲覧日：2018年10月19日）

- Alpers, E.A. 2001 Defining the African Diaspora. Paper presented to the Center for Comparative Social Analysis Workshop, October 25, 2001.  
[https://www.ces.uc.pt/formacao/materiais\\_racismo\\_pos\\_racismo/alpers.pdf](https://www.ces.uc.pt/formacao/materiais_racismo_pos_racismo/alpers.pdf)
- African Heritage in India  
<https://africanheritageindia.org/gujarat/>
- Afropede@ Asian Terms for Black People  
<http://www.afropede.org/asian-terms-for-black-people>
- Ali, O.H. 2011 Introduction. The African Diaspora in the Indian Ocean World.  
<http://exhibitions.nypl.org/africansindianocean/index2.php>
- Basu, H. 2005 Historical roots and customs of the Sidi: India's tribal communities of African ancestry – Gujarat, Karnataka, Andhra Pradesh and Maharashtra. *Frontline* 22(18)  
<https://www.indiantribalheritage.org/?p=11852>
- The East African 2008 India's Sidis, a forgotten diaspora of Africans.  
<https://www.theeastafrican.co.ke/magazine/-/434746/470390/-/view/printVersion/-/ckmon7z/-/index.html>
- Government of India 2011 Census of India 2011: A-11 Individual Scheduled Tribe Primary Census Abstract Data and its Appendix (for Gujarat, Karnataka, Daman and Diu, and Goa).

- <http://www.censusindia.gov.in/2011census/PCA/ST.html>  
The Hindu 2011 African link of Indian Siddis established.  
<https://www.thehindu.com/todays-paper/tp-national/african-link-of-indian-siddis-established/article2212561.ece#!>
- Joshua Project 2018 Siddi (Muslim traditions) in India  
[https://joshuaproject.net/people\\_groups/18795/IN](https://joshuaproject.net/people_groups/18795/IN)
- Kwekudee, K. 2012 Blacks in Pakistan. Trip Down Memory Lane.  
<https://kwekudee-tripdownmemorylane.blogspot.com/2012/08/blacks-in-pakistan-afro-pakistanis.html>
- Lodhi, A.Y. 2008 Linguistic Evidence of Bantu Origins of the Sidis of India. In Prasad, K.P. and J.-P. Angenot (eds.) 2008 *TADIA, the African diaspora in Asia: explorations on a less known fact*. Bangalore, Jana Jagrati Prakashana: 301-313. Retrieved from  
[https://www.researchgate.net/publication/259982748\\_LINGUISTIC\\_EVIDENCE\\_OF\\_BANTU\\_ORIGINS\\_OF\\_THE\\_SIDIS\\_OF\\_INDIA](https://www.researchgate.net/publication/259982748_LINGUISTIC_EVIDENCE_OF_BANTU_ORIGINS_OF_THE_SIDIS_OF_INDIA)
- Modi, R. 2011 Celebration of Siddi Culture and Tradition Workshop: a Report.  
[https://www.researchgate.net/publication/283496138\\_Celebration\\_of\\_Siddi\\_Culture\\_and\\_Tradition\\_Workshop\\_a\\_Report](https://www.researchgate.net/publication/283496138_Celebration_of_Siddi_Culture_and_Tradition_Workshop_a_Report)
- New York Public Library 2013 Africans In India: From Slaves to Generals and Rulers  
<https://www.nypl.org/events/exhibitions/africans-india-slaves-generals-and-rulers>
- Pereira, C. 2006 International Conference on the Siddis of India and the African Diaspora in Asia – 9-20 January 2006, Goa, India.  
[www.blackandasianstudies.org/newsletter/Tadia.doc](http://www.blackandasianstudies.org/newsletter/Tadia.doc)
- Rey, S. 2016 Ancient African Elites in India.  
<http://solarey.net/ancient-african-elites-india/>
- Russell, R.V. 1916 *The Tribes and Castes of the Central Provinces of India*. Vol.1. London, Macmillan. Retrieved from <https://archive.org/details/tribescastesofce01russ/page/n7>
- Schomburg Center for Research in Black Culture, The New York Library 2011a The African Diaspora in the Indian Ocean World: South Asia.  
<http://exhibitions.nypl.org/africansindianocean/essay-south-asia.php>
- Schomburg Center for Research in Black Culture, The New York Library 2011b The African Diaspora in the Indian Ocean World.  
<http://exhibitions.nypl.org/africansindianocean/index2.php>
- Schomburg Center for Research in Black Culture, The New York Library 2011c Soulful Stitching: Patchwork Quilts by Africans (Siddis) in India.  
<https://www.nypl.org/events/exhibitions/soulful-stitching-patchwork-quilts-africans-siddis-india>
- Schomburg Center for Research in Black Culture, The New York Library 2011d Africans in India: From Slaves to Generals and Rulers.  
<https://www.nypl.org/blog/2013/01/31/africans-india-slaves-generals-and-rulers>
- Sen, Jahnvi 2016 Africans in India: Pictures that Speak of a Forgotten History.  
<https://thewire.in/politics/africans-in-india-pictures-that-speak-of-a-forgotten-history>
- Shekawat, R.S. 2012 Black Sufis: Preserving the Siddi's and its age old culture in India. Paper presented at the 4th Indian Hospitality Congress on “Nourishing the Balance of the Universe: through Tourism & Cultures” held at Dev Sanskriti Vishvavidyalaya, Haridwar.  
[https://www.academia.edu/4206146/BLACK\\_SUFI\\_PAPER](https://www.academia.edu/4206146/BLACK_SUFI_PAPER)
- The Sidi Project

<https://thesidiproject.com/#about>

Singh, K. 2015 Syncretic heritage of Africans in India: Identity and acculturation. *The Newsletter* 72.

[https://iias.asia/sites/default/files/IIAS\\_NL72\\_07.pdf](https://iias.asia/sites/default/files/IIAS_NL72_07.pdf)

South Asian University 2016 “Africans in India: From Slaves to Generals and Rulers” Exhibition. Inaugurated.

<http://blog.sau.ac.in/africans-in-india-from-slaves-to-generals-and-rulers-exhibition-inaugurated/>

The Times of India 2015.8.9 Ahmedabad to host exhibition on Africans in India.

<https://timesofindia.indiatimes.com/india/Ahmedabad-to-host-exhibition-on-Africans-in-India/articleshow/48414946.cms>

United Nations 2016 Exhibition ‘Africans in India: From Slaves to Generals and Rulers’ Opens at United Nations Headquarters on 17 February.

<https://www.un.org/press/en/2016/note6471.doc.htm>

UN Web Services Section NDa Slave Trade

<http://www.un.org/en/events/africandescentdecade/slave-trade.shtml>

UN Web Services Section NDb Remember Slavery.

<http://www.un.org/en/events/slaveryremembranceday/index.shtml>

Vallangi, N. 2016 India’s Forgotten African Tribe.

<http://www.bbc.com/travel/story/20160801-indias-forgotten-jungle-dwellers>

国際連合広報センター 2011 アフリカ系の人々のための国際年2011

[http://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/2342/](http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/2342/)

国際連合広報センター 2015 アフリカ系の人々のための国際の10年（2015－2024）

[http://www.unic.or.jp/news\\_press/features\\_backgrounders/13874/](http://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/13874/)

松浦晃一郎 2007 大西洋奴隷貿易廃止200周年記念 国際記念日にて、ユネスコ事務局長松浦晃一郎からのメッセージ

[http://objectives-reconciliation.org/wp-content/uploads/2017/02/KOICHIRO-MATSUURA\\_jpn.pdf](http://objectives-reconciliation.org/wp-content/uploads/2017/02/KOICHIRO-MATSUURA_jpn.pdf)

